

令和5年度 瑞浪市社会教育委員会視察報告

今回は、有賀代表、小栗委員、加藤委員、湯原委員、渡辺委員、松浦委員、岩島委員、伊藤委員、浅沼委員、有賀委員の10名で、岐阜市立岐阜小学校の視察を行った。

岐阜小では、学校運営協議会会長 青山朋宏氏と校長先生、教頭先生に対応していただいた。

まず、初めに、学校の施設について、校長先生から見学しながら説明があった。

○1回の教室の隅に、コミュニティ・ルームを設置し、地域やPTAがいつでも使いやすいように学校が休業日でも、出入りができるようになっている。

○学校の1階には、校区出身の著名な画家の絵や歴史上の人物の掲示があるなど、子供たちが地域の偉人の存在を知り、誇りがもてるような工夫がされている。

○校内の要所に、「ふるさと大好き」の掲示がある。「ふるさと大好き」を合言葉にコミュニティ・スクールの推進していこう思いを子供たちにも伝えようとしている。

○サマースクールやふるさと学習の様子が、至る所に掲示されており、コミュニティ・スクールが盛んに実践されていることを、子供たちだけでなく保護者にも伝わっている。

○今後、一学年が2クラス以上になることはないの見越して、教室が設置されている。1年から6年までの教室は全て2階に設置している。学年ごとに互いの学級が向かい合わせに設置されており、各担任が隣のクラスの授業や子供たちの様子をいつでも見ることができるようになっている。また、2クラスの教室の間に、フリースペースを設け、学年で活動する際に利用しやすい工夫がされている。

○1階の図書室や音楽室は、広々とした空間がある。ふるさと学習等で地域講師の話を聞く際に、活用できるようになっている。音楽室の椅子は、座らないときは横にして机のように使うことができるなどの工夫もある。

○屋上には、子供たちが出ても、転落しないように工夫されている。コロナ禍の際は、音楽の授業でのリコーダー練習を屋上に出て実施するなど、授業でも屋上を活用している。

コミュニティ・スクールの企画で、先日の岐阜の花火の際は、6年生の親子を招待し、屋上で花火を見ることができるようにした。

2008年度の統合で誕生した岐阜小学校。開校当初から、コミュニティ・スクールを実施することが計画されていたこともあり、新校舎はコミュニティ・スクールを実践しやすい工夫が要所に施されている。



次に、コミュニティ・ルームにて、青山氏と藤田校長から岐阜小のコミュニティ・スクールの歩みについて説明を聞いた。

概要は次のとおりである。

- 岐阜小は2008年に金華地区と京町地区が統合してできた小学校。2010年に新校舎が完成した。
- 金華地区は歴史の町であり、35の寺社や古い町並みが残っている。京町地区は司の町であり、市役所や市立図書館などが立ち並んでいる。
- 岐阜小学校開校と同時にコミュニティ・スクールを始める。「ふるさと大好き」を合言葉にふるさと学習を基盤に「学校・家庭・地域」が連携・協働した教育活動を推進している。
- 校舎は、メディアセンター、図書館、コミュニティ・ルーム、特別教室を地域の人にも身近で開かれた場所になるように、全て1階に配置されている。
- これからの子供たちに必要とされる力は「生涯学び続け、どんな環境においても、「答えのない問題」に最善解を導くことができる能力」である。知識・技能などテストで測れるものは答えがあるが、人工知能の仕事になる可能性もある。非認知能力は、主体性や想像力、自己肯定感などテストで測れないものは、人間にしかできない仕事でもある。認知能力は通常の学校教育で育成できる。しかし、非認知能力の育成は、学校教育のみでは実現が難しい。そのため、地域之力、特に親世代ではない高齢者之力が必要である。
- 「三つ子の魂百まで」という言葉があるが、同様に、「現在の学校の姿が将来の地域の姿である。」といえる。
- 岐阜小のコミュニティ・スクールの組織は、学校運営協議会と3つの専門組織、その専門組織を岐阜小コミュニティ・サポーターが支えている。岐阜小コミュニティ・サポーターには、地域・保護者ボランティア、学生ボランティア、地元企業・地域等諸団体が関わっている。
- 学校運営協議会では、「学校方針」「教育課程の編成」「施設の管理」等について協議、「地域住民の理解、協力、参画」の推進、「定期的な学校に関する状況」の点検と評価を行う。
- 学校運営協議会構成員は、現在は保護者OBや3つの大学関係者を含め、計26人で構成している。地域のそれぞれの立場がはっきりしている人が集まると揉めるので、その中和剤として大学関係者を入れている。
- 学校運営協議会の理事会は年2回、協議会は年7回実施している。
- 専門部会「学び部」では、「ふるさと学習の推進」「学習支援ボランティアの支援とその人材の発掘」「読み聞かせ」「サマースクール」「放課後スクール」「土曜日等の教育活動の支援」「教科教育、道徳教育、総合的な学習の時間」等における学習環境の整備、「地域住民の積極的な参画」の推進等を行っている。
- 学び部 学習支援ボランティアでは、様々な教科においてボランティアが参加している。
- 学び部 読み聞かせでは、朝活動の時間に実施している。令和4年度は12回実施し、地域ボランティアの参加は延べ48名であった。
- 学び部 ふるさとスクールでは、「靴飛ばし」「英語で遊ぼう」など放課後の時間を利用し、学びや遊びの場を提供した。令和4年度は1回実施し、地域ボランティアは延べ7名であ

った。

- 学び部 サマースクールでは、夏休み始まってすぐの10日間で、学校で学んだことをさらに発展させることを主な目的とした体験型授業を行っている。
- 今年のサマースクールは、15講座を開催し、参加児童は延べ458名であった。(在籍児童数は274名)
- 1講座に10名以上のボランティアが参加している。ボランティアは登録制にしておらず、やりたいボランティアや都合があった人が自由に参加している。講座の講師も、現職の教諭から地域の蕎麦屋の店主まで、専門分野に長けた方が積極的に参加してくださっている。
- 学び部 サマースクールでは、非認知能力を育むため、子供たちに学校ではできない体験や経験を増やすことを意図的に設定している。「落書きをしよう」「カンボジアから平和を学ぶ」
- 安全に関わることは徹底的に議論するが、基本的に打ち合わせはできるだけ簡単にしている。各自がその場で改善しながら実行するスタイル。失敗しても非難するのではなく、誰かがその場でカバーしてくれる信頼関係を築いている。大人が失敗しても、その人自身の成長につながるだけでなく、それを見た子供の成長にもつながる。関わる人すべてが成長する場にする。
- 専門組織 安全・安心部では、登下校及び、緊急災害時における児童の安全・安心に関する活動の推進と情報発信等を行っている。
- 専門部会 安心・安全部では、「にっこり見回り隊」の下校見回りを実施している。令和4年度は年210日実施し、ボランティアは延べ1260人の参加であった。住民の地域デビューの場となっている。
- 安心・安全部では、交通安全教室や命を守る訓練、地域防災学習などにおいて、消防団、水防団、交通安全協会による専門的な立場での助言をもらっている。
- 安心・安全部でも、防災教育は非認知能力を高めていくことに必要不可欠であるといった考えで、防災教育を推進している。
- 専門組織 地域行事部では、児童の参加する地域行事等の企画・調整と情報発信等を行っている。
- 一番大きな行事は、毎年11月に実施している「ふるさとふれあいウォーク」。住んでいる地域のすばらしさを伝え、大人と子ども、地域に住む大人同士の信頼関係を築く。もともと市民会議が実施していたが、コミュニティ・スクールで実施することで参加年代を広げることができている。
- ふるさとふれあいウォークでは、各チームがタブレットを使い、QRコードを読み取り、問題を解いていく。チームには親は入らない。
- ふれあいフェスタ協力団体は、小中PTAや市民会議、各自治会連合会、福祉協議会、子ども会、体育振興会、公民館、交通安全協会、民生児童委員会、各地域の諸団体等である。協力団体の数や種類からも、地域ぐるみで総力を挙げて実施していることが分かる。

○岐阜小コミュニティ・スクールの歴史は次のとおりである。

【1～4年目（平成20～23年度）】

・学校が地域資源や地域人材を活用する。

【5～6年目（平成24～25年度）】

・教職員、地域住民、保護者で学校を創造する。

・児童も教職員、地域住民、保護者に働きかけていく。

・コミュニティ・スクールは、地域コミュニティの核として、関わる全ての人々が成長する場所、地域の生涯学習の場とする。

・コミュニティ・スクールの枠を超え、学校・地域・保護者・児童・生徒の横のつながりができ始めてきた。

・子供たちが地域のためにできることを考え、実践し始めた。地域を創造する子供たちが育ってきた。様々な場面での「ふるさと学習」を基盤とした取り組みは地域を刺激し、地域経済の活性化に繋がっていった。

【7年目～（平成26年度～）】

・教職員、地域住民、保護者、児童、生徒が互いに関わり合って地域を創造する。

コミュニティ・スクールが地域を創造する場所になっている。



○講話の後、以下のような質疑応答があった。

Q：瑞浪市は学校運営協議会の会員数が決められている。また、会員があて職が多い。岐阜市ではどうか？

A：岐阜市も同様である。ただ、会員数については、条例を話し合っただけで変えてもらってきている。岐阜市も最初はあて職で会員を集めており、会議への参加に消極的であった。しかし、次第に子どもとの関係ができてきて、消極的だった会員もだんだんとやりたいに変わっていった。10年はかかると思う。

Q：ボランティアは無償で行っているということだが、予算はどのようになっているのか。

A：ボランティアは全員無償である。岐阜市から25万支給されている。しかし、人件費や飲食代には使えない。

Q：協議会が年7回とのことだが、開始時間は何時からか。

A：会議は全て夜の7時からである。学校からも管理職や関係職員が参加している。

Q：地域の人をどうやって活動に取り込んでいるのか。

A：地域の人には学校の先生のような教育はできない。しかし、地域の人にしかできないことがある。非認知能力や自己有用感を育てるには、地域の人々の力が必要である。ということを経験者の方々に伝えている。